

連日の残業を経て、遂に掴み取った定時退勤。意気揚々と自宅の玄関扉を開けた私の前には、今、ふたつの選択肢があった。

つまり、人の家で胸を丸出しにしている女と、私が昨日洗濯した下着を脱ぎかけの男。そのどちらを殺すべきかということだ。決断に至るまで、体感ではコンマ一秒もかからなかった。

パンプスを脱ぐ間もなく部屋の中に駆け込んだ私は、阿呆みみたいな格好のまま固まっている男の頭を鷲掴み、ベッドの上から引き摺り下ろした。転がり落ちた体に跨り、手にしていたスーパーのビニール袋ごと、その顔面を殴りつける。衝撃で、中のパック寿司が潰れて飛び散った。最悪だ。勿体ない。何もかも。

もっと最悪なのは、男が抵抗を試みたことだ。黙って殴られていればいいのに、あろうことか、こちらの腕を掴んで止めようとしたので、私は悲鳴とも奇声ともつかない声を上げ、男の股間を踏みつけた。今度はハッキリとした悲鳴が上がる。芋虫のように、しかしそれよりも随分と素早い動きで伸縮したかと思うと、私の支配下から転がり出てみせた。呻き声を上げながら、前傾姿勢で玄関に向かう。いつの間にやらパンツを履き直していて、小賢しくも床に落ちた服を拾い、そのまま飛び出していった。

「死ね！」

私の吐き出した呪詛が、あの間抜けの耳に届いたかどうかはわからない。舌打ちをひとつして、私はのろのろと玄関に向かい、扉を閉め、チェーンをかけた。すると、

「えっ」

短い音に振り向く。知らない女と目が合った。ベッドの上で、さっきまでの姿勢のまま、私を——正確に言うならば私の後ろ、閉めたばかりの玄関扉を見ている。そうか。この女を追い出してから閉めるべきだったのか。考えが及ばなかった。

私は黙って女を見つめた。パッチリとした二重。恐らくは天然もの。ナチュラルを装ったがっつりメイク。多少乱れた、ピンクベージュの髪。チークが役に立たないほどその顔が青ざめていなければ、きっともっと愛らしいのだろう。白を基調としたふんわりした服が、鳥の羽みたいに見えた。

そう。たとえるのなら、小鳥のような女。人のものに手を出す盗人雀。

でもどうやら、その舌をわざわざちょん切ってやる必要はないらしい。女は動きを止めたまま、声すら出ない様子だ。私の横を通り抜けて扉まで辿り着く勇気がないのだろう。

さて。

どうしようか。

どうしてやろうか？

再びの選択肢。やれることはたくさんある。あのゴミクズにしてやったように、この女の小綺麗な顔をぶん殴ってやったとして、私は許される立場にある……ような気がする。めちゃくちゃに泣かせてやれば、少しは気持ちよさを味わえるんじゃないだろうか。それとも、現在進行形で人前には出られない感じのその姿を、写真に収めてやるとか。ネットにばら撒けば、そこそこ面白いことになるだろう。あれもできる。これもできる。疲れきっていたはずの脳が、糖分をぶち

込まれたみたいに、ギョルギョルと回転する。

私が一步を踏み出すと、女は大袈裟に肩を震わせた。まるで幽鬼でも見たかのような顔。限界まで開いたその目を見ていたら、ふっ、と、拳から力が抜けた。脳みその回転が失速していく。

「……着れば？」自分の声は、怒っているというより、思いのほかウンザリしていた。困惑した表情の女を、顎で指し示す。

「いつまでその格好してんだよ。そういう趣味？」

今度は真っ赤な顔をして、胸もとを手で隠す。私はそばの棚から、煙草の箱とライターを取り出した。火をつけながら、言う。

「言っておくけど。あいつ、これが初めてじゃないからね。あんた以外にも、この部屋に女、連れ込んでるから。目に見えるところでやらかしたのは、これが初めてってだけ」

話しながら、細く立ち昇る煙を眺める。そういえば最近禁煙していたし、部屋の中での喫煙を禁止したのも私自身だ。どうでもいいことだが。

すべては情性だ。人生なんて、その繰り返し。

「ほしければやるよ。あんなんでもよければ。どうする？」

肺いっぱい煙を突っ込んでから、振り向いて聞く。女はいつのまにか、その顔から色を消していた。私のことをしばらく見つめた後、ゆっくりと首を横に振る。利口だな。私よりいくつ年下か知らないが。

「あっそ。じゃあ、出てって」

壁に体を寄せてやれば、女はやっとベッドから降りた。さっきの私のように、のろのろと玄関扉に近づいていく背中を見送ろうとして、ふと思い出す。

「ちょっと待て」

女がこちらを向く。

「金、置いて行ってよ。250 円。お前らのせいで無駄になった」

床に散らばった、かつて寿司だったものたちを指し示す。仕事帰りに立ち寄ったスーパーで見つけた寿司。元値は 500 円、黄色い半額シールが貼られて 250 円。

女はいくらか訝しげな表情をしたが、たぶん、向こうも向こうで思考するのに疲れたのだろう。特段の抵抗なく財布を取り出すと、硬貨をいくつか取り出し、私の手のひらにのせた。ちゃりん。

「どうも」

今度こそ、女が出ていく。

私は煙草を咥えたまま、その場に腰を下ろそうとして、未だ靴を履いたままだったことに気がついた。脱ぎ去ったそれを玄関に放り、胡座をかいて、手のひらを見つめる。この部屋での生活を始めてから三年……いや、そろそろ四年。その最終結果がこれ。きっかり 250 円。

まあ、こんなもんか。

煙草を咥えたまま、ぼんやりとこれまでの日々を思い返す。一時間ほど経つと、扉の開く音がした。視線だけそちらに向ければ、ひょっこり顔を覗かせたそいつと目が合う。そういえば、女が出ていった後、鍵をかけ直すのを忘れていた。

「た……ただいま」

黙ったままの私に、クズ野郎は静々と部屋に上がり込んできた。目の前に正座する。そして、

ビニール袋の中から、何かを取り出した。

バック寿司だ。

「これ。大したあれじゃ、ないけど。この時間みんな売り切れてて。もっとすごいやつがよかったよね。ごめん」

私が買ったものよりいくらか豪華な模様のトレイに入ったその値札を見ると、748 円。半額シールも貼られていない。

パンツードでスーパーに入店したこいつを想像してみる——そんなわけないか。服、もう着てるし。どうせ部屋を出てすぐに体裁は整えただろう。そうじゃなきゃ、今頃お巡りさんのお世話になっているはずだ。くだらない思考を浮かばせていると、クズが距離を詰めてきた。

「まゆりとすれ違ったんだけど……もっちゃん、あの子のこと許してあげたんだね。無傷だったし」

「へえ。まゆりっていうの。あの子」

「あ、いや。うん」

「何か言ってた？」

「何も。無視されたよ」

「そう」

「……ごめんね、もっちゃん。最近忙しくて、顔、全然見れなかったじゃん。だから寂しくて。つい。もうしないよ、絶対。俺、もっちゃんが一番なんだよ」

ほとぼりが冷めるのを待つのは悪手。やらかした時は即謝罪。私のこと、よくわかってんじゃない、と言ってやりたくなる。

私はこの男の、行き当たりばったりでどうしようもないくせに、変な学習能力だけはあるところを気に入っていた。顎下を撫でて、撫でられて、そういう、くだらない何かを。

「もっちゃん」

距離がさらに近づく。いじらしい様子で、生温く光る目が、すぐそこに。

「……ごめんね？」

私の口もとから、煙草を取り去っていく。言葉のない合図に瞼を閉じてやれば、唇に熱を感じた。なんだかちょっと甘い気がするの、煙草のせい。

たっぷり十秒、濃厚な口付けをかわして、私たちはお互いに息を吐いた。間近で視線を交わすと、そいつが微笑んだので、私も微笑み返す。あの女にも、こうして笑いかけてやればよかった。

まゆり。

あんた、こいつのこと、無視したんだって？

大正解だよ、クソ女。

「あのさ」

「なーに」

「私、あんたの恥ずかしい写真、死ぬほど持ってっから」

「え？」

「病院代は自分で払えよ」

手の中で、硬貨が掠れて轉る。私は全力で、ゴミクズ浮気野郎の鼻っ柱に、拳を叩きつけた。